

行事週間で生徒たちが獲得する力

9月に開催した行事週間にご来校いただいた皆様ありがとうございました。

小石川では、芸能祭、体育祭、創作展を三大大行事と呼び、この三大大行事を集中的に実施するおよそ10日間を行事週間と呼んでいます。

行事週間中は授業を行わず、生徒たちは三大大行事の準備、運営（片付けを含む）に専念します。多くの小石川の生徒にとって、行事週間は学校生活の中で最も輝かしく、かつ楽しい思い出で、私が毎年行っている6年生との面談の中でも、行事週間がどんなにか楽しく、かつ充実していたか、運営を担当することで自分を大きく成長することができたかを語る生徒が大勢いて、生徒がさまざまな能力や資質を獲得していく上で重要な役割を果たしていることが分かります。

これは行事週間が生徒たち自身によって計画、立案され、実施、運営されているからこそ味わうことができる醍醐味であり、他校にはない小石川でしか経験できない貴重な宝物であるからでしょう。

行事週間という呼び方はすでに戦前の旧制府立第五中学校の頃からあったことが、小石川の同窓会である紫友同窓会ホームページに記載されていますが、今日に続く現行のスタイルとして確立したのは昭和45年（1970年）からのことです。

大正8年（1919年）4月に小石川は開校し、早くもその翌年の大正9年（1920年）の9月には「夏期休暇記念展覧会」11月に「創作記念運動会」12月に「学芸会」が開催され、後の三大大行事の最初の出発点があることが分かっています。

紫友同窓会の編纂した「立志 開拓 創作 百年の系譜」を見ると、戦前の旧制府立第五中学校時代の小石川では、同じ年に三大大行事を全て実施した年と、そのうちの一つの行事、もしくは二つの行事を実施した年とがあり、おそらく時局の状況やその時の学校の事情によってどの行事を実施するのか判断しているものと想像します。戦時下において三大大行事を全て実施した最後の年は昭和17年（1942年）のことで、戦時色が濃い創作展、芸能祭であったということが記載されています。

なお、この大正9年（1920年）9月に開催された「夏期休暇記念展覧会」、その翌年の「第1回創作展覧会」こそが、現在の高等学校の文化祭の始まりであるという教育研究があります。「高校文化祭の教育論 生徒の自主性・主体性を育てるために 小山利一 小西悦子編著（学事出版）」によれば、諸説はあるけれども、旧制府立第五中学校であった小石川において高等学校文化祭が始まったと述べられています。

前掲の「立志 開拓 創作 百年の系譜」によると、「夏期休暇記念展覧会」は、伊藤長七初代校長先生が「夏休みは休みではない」という考えの下、「夏休みの間になんでもよいから創作、創案し、研究して、それを出品せよ」と言ったことから開催され、翌年の「第1回創作展覧会」においては、生徒の作品だけではなく、小川未明、土井晩翠、有島武郎、徳富蘇峰、徳富蘆花といった有名小説家からの出品、生徒保護者からの出品、他の学校や工場からの出品があり、生徒作品 300 点と学校外作品 200 点が展示されたということです。

戦後、全国の文化祭の中で最初に復活したのも府立第五中学校の創作展であったと「立志 開拓 創作 百年の系譜」に述べられています。

昭和 20 年（1945 年）4 月 13 日のアメリカ軍の空襲により校舎は焼失し、「府立五中」は、昭和 20 年内にその所在地を「明化国民学校」に移転し、さらに滝野川にあった「旧陸軍東京第一造兵廠跡地」の移転し、翌年に「小石川区同心町校舎」に移転しました。

このように校舎を転々とする中で、戦後の最初の創作展が復活、実施されました。また、芸能祭についても東京女子高等師範学校講堂で復活、実施されました。体育祭については名称を戦前の「運動会」から「体育祭」に変更するまで実施計画は進んだようですが、食糧難であった当時、生徒たちに運動させることは危険だと考え、実施することができなかったと記録に残っています。

旧制府立第五中学校は戦後「都立第五中学校」「都立第五高等学校」と名称を変え、昭和 25 年（1950 年）に都立小石川高等学校となりました。三大行事である芸能祭、体育祭、創作展も幾度かの曲折を経ながら毎年実施されるようになりました。

昭和 30 年（1955 年）ももとの府立五中の校地であり、現在の小石川の校地である駕籠町に戦後最初の校舎が完成し、小石川の生徒たちは駕籠町の本来の学校の場所に帰ってきました。

創作展については、時代の変遷とともに内容が変化していったことが記録から読み取れます。「百年の系譜」には、昭和 31 年（1956 年）の記録として「音研と電波研合同レコードコンサートが開かれ、歌う会がフォークダンスを催すなど（中略）戦前の発明展であった創作展が、戦後にクラブの研究発表の場と化し、一般生徒の関心が次第に薄らいていくのを見た委員会が創作展をお祭りにしようとする第一歩の試みと見受けられる。」昭和 39 年（1964 年）には「大多数の生徒が参加できる創作展を目標として（中略）「クラブ主体」から「クラス主体」へ移り変わった。」昭和 47 年（1972 年）「まず、喫茶店が多いこと。そしてお化け屋敷、レコードコンサート…。当時はどこの学校の文化祭は似たり寄ったりだった。」とあり、創作展の在り方に生徒、教職員が苦悩することが記録から読み取れます。

平成 4 年（1992 年）に現在の校舎が完成し、平成 16 年（2004 年）に創作展の参加クラ

スは全クラス演劇と取り組むこととなりました。そして、その2年後に中等教育学校の第1期生が入学し、中高一貫教育下での行事週間が始まりました。

「行事週間」誌の「立志」の最後のページを見ると、現在の行事週間は13の委員会の委員長と副委員長、2つの局の局長と副局長、会計、書記とで運営されていることが分かります。13の委員会の中には小石川の生徒会である中央委員会や、新しく設置されたIT委員会もあります。

運営に携わっている構成メンバー全体を行事運営委員会と呼び、中央委員会副委員長（生徒会副会長）が行事運営委員会委員長として、全体を総括している組織となっています。

行事運営委員会を構成する各委員会の委員長は主に5年生が務めています。さらに、中央委員会以外の各委員会は、全てのクラスから選出されている委員の生徒たちによって構成されていて、行事運営委員会で決まったことや伝達事項は、各委員会が開かれて各クラスに伝達される仕組みとなっています。

すなわち、行事週間を運営している委員会組織は、各クラスの委員を含めると、小石川の生徒の何割かを占める巨大組織であることが分かります。また、放送委員会などは、各クラスからの代表だけでは芸能祭の運営が担い切れないので、委員の生徒たちが自分の友達をボランティアで募って、「希望委員」として行事運営の手伝いをしてもらっているということです。

体育祭においては、実際に体育祭の運営にあたる体育委員会とは別に、縦割りの各クラスを色別の団を取りまとめ、リーダーシップを発揮する6年生の応援団長がいます。そして体育祭を盛り上げるための立て看板のデザイン係、各団のTシャツをデザインする係、応援ダンスの振り付けや衣装を考えて、練習を指導する係もいます。

創作展でも、各クラス内にはさまざまな役割があり、創作展のクラス展示や演劇の責任者である「団責」や、教室内外、校舎内の装飾を担当する「外装」「内装」「階段装飾」「ポスターチラシ」といった係、クラス劇に使用する「大道具」「小道具」係、「照明」「BGM」「効果」といった係、劇を演出する「演出」「脚本」係、登場人物として実際に劇で演技をする「キャスト」、クラスTシャツをデザインする係などがあります。

これらの役割に加えて、それぞれ生徒は所属する部活動での展示や演奏、パフォーマンスを担当し、有志の出演団体としての役割を果たすなど、生徒たちが担当している委員会、係、役割を一つ一つあげていけばキリがなく、一人で何役も役割をこなしている生徒がいるのは当たり前の状況で行事週間は準備され、運営、実施されます。

役割に伴う責任を果たすため、生徒は自分の担当している委員会、係、部活動、有志団体の「仕事」をがんばります。そして、とても多くの「仕事」を同時に実行していく充実感と、

クラスメートや上級生、下級生などのさまざまな人に期待される自己肯定感や自己有用感、自分の役割を成し遂げた時の達成感こそが、行事週間に参加する小石川の生徒たちの大きな喜びであると考えます。

一方で、生徒たちにとって行事週間を作り上げていくプロセスで、最も手間がかかるのは、自分の任された「仕事」を完成させるために、他の生徒たちと話し合いをきちんと行って意見を調整していくことです。

それぞれの生徒が自分のイメージをもち、やりたいことに強いこだわりがあります。後期生ともなると、生徒たちはおよそ1年間かけて行事週間を準備しますが、それだけ長期の準備期間が必要となるのは、生徒たちがそれぞれの意見を持ち寄って、生徒同士ですり合わせながら、一つずつ困難を解決する必要があるからです。

生徒たちがこうした困難を解決していくプロセスは、大人である私たちが仕事を完成させていく道筋と全く同じであると感じます。小石川の生徒たちが行事週間で経験していることは、自分の意見の主張すべきところと我慢するところを判断する、他者の意見をよく聞いてその考えを受け入れながら、「仕事」の完成にどうやったらこぎつけられるのかを進行管理し、多くの仲間と協力し、調整しながらプロジェクトをやり遂げるという実体験です。

行事週間のようなきわめて規模の大きな学校行事を、生徒たちが主体的に準備し、運営することが、小石川の生徒たちの、人としての成長につながっていくことは疑いの余地がありません。行事週間があることこそが、小石川の生徒たちが卒業後にさまざまな分野で活躍できる社会人に育っていく。そして、小石川の生徒たちが、自分は小石川生であるという誇りとアイデンティティにつながっている、そんなことを感じています。